

看護学生の学習進度に伴う母性意識

植村 裕子*, 榮 玲子, 松村 恵子

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

Relation between Learning Progress and Maternal Consciousness of Student Nurses

Yuko Uemura*, Reiko Sakae, Keiko Matsumura

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

要旨

4年制課程の学習進度に伴う母性意識を把握することを目的に、4年制大学看護学生を対象に縦断調査を実施した。調査内容は、基本属性および母性意識として対児感情および母性に関する認知である。調査時期は、3年次の母性看護学講義後、演習後、実習後および4年次の全ての実習終了後の4時期とした。結果、看護学生の特徴として、対児感情および母性に関する認知である母性意識は高いことが確認された。学習進度に伴う母性意識は、3年次の母性看護学講義後、演習後、実習後の3時期に比べ、4年次では低下する傾向がみられた。これは妊産褥婦および新生児を講義・演習によって学習し、実習では身近に感じることで母性意識は高められ維持されていたが、1年を経過すると母性意識は低下することが示された。したがって、身近に妊産褥婦および新生児を学び・触れる機会を設けることは、母性意識の維持向上につながることを示唆された。

Key Words: 母性看護学 (maternity nursing), 看護学生 (student nurses), 母性意識 (maternal consciousness)

*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 植村 裕子

*Correspondence to: Yuko Uemura, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

序 文

看護学生は看護教育において、母性看護学を学ぶ機会がある。そのなかで、『母性』について学び、母性看護についての知識・技術を修得していく。広辞苑¹⁾によると『母性』とは、女性が母として持っている性質。また、母たるものであり、女性に特有な性質である。世界保健機関（WHO）の母性保健委員会では、母性とは、現に子どもを産み育てているもののほか、将来子どもを産み育てるべき存在、および過去においてその役目を果たしたもの²⁾と定義している。松本³⁾は、『母性』は子どもを産み、育てるという生殖に関する概念と述べている。上記のように『母性』には、様々な解釈がされており、世間で聞きなれている『母性』の意味には、一人ひとりの相違があることが推測される。次に、『母性意識』を大日向⁴⁾は、母親である女性たちが自分が母親であることをどのように認識し、また、子どもに対する母親としての役割の意識であるとし、母親役割受容尺度を作成し、母性意識の世代差や発達変容について研究をしている。また、花沢⁵⁾は、女性が母親になる、あるいは母親であることの自覚と、その自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観との両者を包括する概念と定義し、母性意識質問紙を作成し妊娠期と産褥期の特徴を明らかにしている。このように、『母性意識』の解釈もそれを測定する方法も様々である。

青年期の学生は、これから親になる準備期間でもあり、この時期の母性意識に着目した研究は多い。特に、看護学生では母性看護学の講義、演習、実習によって母性意識の変化を調査した研究は数多くある。看護学生の学習進度に伴う母性意識に関する研究⁶⁻¹⁰⁾では、母性意識の解釈は様々であるが、母性看護学実習終了後には母性意識が高められ、学習進度に伴う母性意識の変容が明らかになっている。また、看護学生の母性意識の測定には、花沢の対児感情評定尺度と母性理念質問紙を測定尺度として用いるものが多い。榮ら¹¹⁾もこれを用いて母性意識を測定しており、家族背景や乳幼児接触経験が母性意識に影響すること、看護学生の特徴として他の大学生よりも母性意識が高いことを明らかにしている。このように、これまで短期大学など3年制課程の看護学生を対象として、母性看護学実習に伴う母性意識の変化を調査したものが多い。今回、4年制課程の看護学生を

対象として、学習進度と母性意識との関連を縦断的に調査することには意義がある。これは、今後の4年制課程の母性看護学の講義、演習、実習に関する教育方法への示唆が得られるだけでなく、これから親準備期にある看護学生以外の次世代育成に向けた基礎的な資料となり得ると考える。

本研究では、4年制課程の看護学生を対象として対児感情と母性に関する認知について、3年次の母性看護学の講義後、演習後、実習後および4年次の全ての実習終了後の4時期の縦断調査を行い、4年制課程における学習進度に伴う母性意識の推移を明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 調査対象

4年制大学看護学科3年次の学生49名。

1) 母性看護学の学習進度

母性看護学Ⅰは、2年次後期に開講、人間の生涯における性の発達と健康について学び、母性看護に必要な基礎的な看護についての理解を目的として、講義および演習で構成されている。母性看護学Ⅱは、3年次前期に開講、周産期の妊娠、分娩、産褥における生理的、病理的現象、妊産褥婦と新生児の生理と病理、形態と機能など特徴について学び、母児と家族の基礎的な看護について理解することを目的として、講義および演習で構成されている。演習では、事例に基づく看護過程の展開、看護技術として新生児の健康診査、沐浴、妊婦の健康診査などを行う。母性看護学実習は、母性看護学ⅠおよびⅡ履修後、7月から10月にかけて1グループが6から7人編成で2週間行う。1週目の1日目は、学内オリエンテーション、新生児の健康診査および沐浴、育児疑似体験人形を用いた育児行動の演習を行う。1週間は妊産褥婦の看護、もう1週間は地域の母子保健活動1日、新生児の看護2日、妊婦の看護1日を展開している。

なお、3年次の実習として、母性看護学実習と共に小児看護学実習、成人看護学実習、老年看護学実習が展開されている。さらに、4年次前期には地域看護学実習、在宅看護学実習、精神看護学実習が展開され、後期には統合実習が行われている。

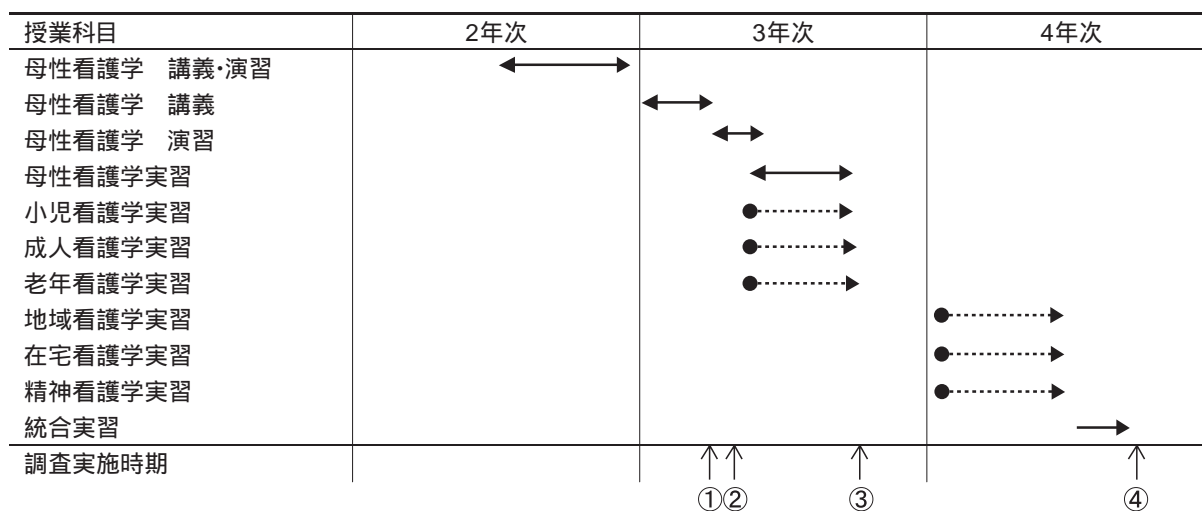


Fig. 1 Relationship between learning progress and times of surveys

2. 調査期間

2006年6月～2007年12月.

3. 調査方法

自記式質問紙を用いた4時期の縦断調査を行った. 調査は, 3年次の母性看護学Ⅱ講義後, 演習後, 実習後, 4年次の全ての実習終了後の4時期に行った.

4. 調査内容

対象の属性, 母性意識として対児感情および母性に関する認知を調査した. 属性には, 乳児の接触経験を含めた. なお, 対象の属性は, 母性看護学講義後のみに行った.

対児感情は, 乳児に対する感情の一般的様相を知る目的で花沢⁵⁾によって開発された対児感情評定尺度を用いた. これは, 2下位概念で構成され, 児を肯定的に受容する接近感情14項目, 児を否定し拒否する回避感情14項目の計28項目から成る. 「非常にその通り」3点から「そんなことはない」0点の4段階評定である. 拮抗指数は, 接近感情と回避感情との相克度を示し, $\text{回避得点} / (\text{接近得点} + \text{回避得点}) \times 100$ で算出する.

母性に関する認知は, 母性という用語をどのように認知しているか明らかにすることを目的として松村¹²⁾によって開発された母性に関する認知尺度を用いた. これは, 4下位概念で構成され, 【女性特有の性質】4項目, 【母親の性質】4項目, 【誰もが持つ心の傾向性】4項目, 【幼いいのちに対する慈しみの心】4項目の計16項目から成る. 「全くそうである」5点から「全く違う」1点の5段階評定である.

なお, 対児感情評定尺度および母性に関する認知尺度の信頼性および妥当性は確認されている.

5. 分析方法

記述統計および4時期の比較は一要因の分散分析, 多重比較 (Bonferroni) を行った. 有意水準は5%未満とした. 統計解析はSPSS 14.0 for windowsを用いた.

6. 倫理的配慮

調査に際しては, A大学研究等倫理委員会の承認を得た. 1回目調査時には, 対象に研究の主旨, 協力の有無による成績への関与, いつでも参加を辞退でき, それによる不利益がないことを説明した. 了承が得られた者には, 同意書を記入し, 縦断調査であるため調査票には学籍番号を記載することを求めた. データは, 個人が特定されないようにデータ化し, 個人情報や秘密の保持などプライバシーを配慮した. また, データの使用は大学内の個人用パソコンのみで行い, 施錠可能な個人用机の中で保管した.

結 果

49名のうち, 3年次の母性看護学講義後, 演習後, 実習後および4年次の全ての実習終了後の4時期の回答が得られた42名 (有効回答率85.7%) を分析した.

1. 対象の属性

Table 1に示した. 乳児に触れた経験のある学生は35名 (83.3%) であった. その内容は, 抱っこをした27名, 触れた15名, オムツを交換した7

名，ミルクを飲ませた5名であった。

Table 1 Attributes of subjects

| | | n=42 | |
|------|----------------|------|------|
| 項目 | | (人) | (%) |
| 年齢 | 平均 20.2(20~22) | | |
| 性別 | 男性 | 3 | 71.1 |
| | 女性 | 39 | 92.9 |
| 家族構成 | 核家族 | 26 | 61.9 |
| | 拡大家族 | 16 | 38.1 |
| 乳児と | あり | 35 | 83.3 |
| 接触経験 | なし | 7 | 16.7 |

2. 4 時期の比較

1) 対児感情

接近得点の4時期の平均値は，Table 2に示し，講義後 26.4 ± 6.6 ，演習後 25.7 ± 7.9 ，実習後 26.1 ± 6.6 ，4年次 22.8 ± 6.8 であった。回避得点は，講義後 8.1 ± 4.5 ，演習後 9.0 ± 4.4 ，実習後 8.0 ± 4.6 ，4年次 7.1 ± 4.5 であった。それぞれ4時期の平均値を比較すると，接近得点 [F (3, 120) = 6.89, $p=0.000$]，回避得点 [F (3, 120) = 2.86, $p=0.040$] で有意差が認められた。多重比較の結果，接近得点は4年次より講義後 ($p=0.002$)，演習後 ($p=0.042$)，実習後 ($p=0.005$) が高かった。回避得点は4年次より演習後 ($p=0.033$) が高かった。

対児感情28項目の4時期の平均値は，Table 3に示した。最も低い項目をみると，講義後，演習後，実習後，4年次のすべての時期において「あつかましい」であった。最も高い項目をみると講義後，演習後，4年次は「ほほえましい」，実習後は「あたたかい」であった。28項目の4時期の平均値を比較した結果，12項目に有意差が認められた。

多重比較の結果，「あたたかい」($p=0.011$)，「うれしい」($p=0.047$) は，4年次より実習後が高く，「よわよわしい」($p=0.001$)，「むずかしい」($p=$

0.049) は，4年次より演習後が高かった。「ほほえましい」は，4年次より講義後が高く ($p=0.003$)，「しろい」は，実習後より4年次が高かった ($p=0.021$)。「ういういしい」は，4年次より講義後 ($p=0.024$)，演習後 ($p=0.002$)，実習後 ($p=0.017$) が高かった。同じく「やさしい」は，4年次より講義後 ($p=0.000$)，演習後 ($p=0.000$)，実習後 ($p=0.025$) が高かった。「てれくさい」は，実習後より演習後 ($p=0.020$)，4年次より講義後 ($p=0.036$) が高かった。「うつくしい」は，4年次より講義後 ($p=0.028$)，実習後 ($p=0.007$) が高く，「すばらしい」は，演習後より講義後 ($p=0.023$)，4年次より講義後 ($p=0.001$)，実習後 ($p=0.003$) が高かった。

2) 母性に関する認知

Table 4に示すように，4時期の平均値をみると【女性特有の性質】は，講義後 16.2 ± 2.1 ，演習後 16.4 ± 2.6 ，実習後 16.3 ± 2.4 ，4年次 15.5 ± 1.9 であった。【母親の性質】は，講義後 15.1 ± 2.5 ，演習後 15.5 ± 2.5 ，実習後 14.9 ± 2.8 ，4年次 14.3 ± 2.2 であった。【誰もが持つ心の傾向性】は，講義後 16.8 ± 2.0 ，演習後 16.7 ± 1.9 ，実習後 16.9 ± 2.4 ，4年次 15.5 ± 2.2 であった。【幼いいのちに対する慈しみの心】は，講義後 15.9 ± 2.1 ，演習後 16.3 ± 2.3 ，実習後 16.4 ± 2.0 ，4年次 15.4 ± 1.8 であった。

これらの平均値を比較した結果，【誰もが持つ心の傾向性】[F (3, 120) = 5.55, $p=0.001$] と【幼いいのちに対する慈しみの心】[F (3, 120) = 2.81, $p=0.041$] で有意差が認められた。多重比較の結果，【誰もが持つ心の傾向性】は，4年次より講義後 ($p=0.039$)，演習後 ($p=0.015$)，実習後 ($p=0.003$) が高かった。【幼いいのちに対する慈しみの心】は，4年次より実習後 ($p=0.007$) が高かった。











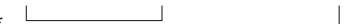








Table 2 Comparison of feelings toward children

| | | n=42 | | | | | |
|------|--|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------|-------|
| 項目 | | 講義後 | 演習後 | 実習後 | 4年次 | F値 | 有意確率 |
| 接近得点 | | 26.4 ± 6.6 | 25.7 ± 7.9 | 26.1 ± 6.6 | 22.8 ± 6.8 | 6.89 | 0.000 |
| | | | | | | | |
| 回避得点 | | 8.1 ± 4.5 | 9.0 ± 4.4 | 8.0 ± 4.6 | 7.1 ± 4.5 | 2.86 | 0.040 |
| | | | | | | | |
| 拮抗指数 | | 31.2 ± 17.1 | 37.2 ± 19.7 | 30.4 ± 16.4 | 32.6 ± 20.1 | | |

* $p<0.05$ ，** $p<0.01$

Table 3 Item-by-item comparison of feelings toward children

n=42

| 項目 | 講義後 | 演習後 | 実習後 | 4年次 | F値 | 有意確率 |
|--------|--|--|---|----------|------|-------|
| あたたかい | 2.66±0.5 | 2.54±0.6 | 26.1±0.4 | 2.47±0.5 | 3.52 | 0.017 |
| | | | *  | | | |
| よわよわしい | 1.64±0.9 | 1.97±0.6 | 1.80±0.8 | 1.45±0.8 | 5.01 | 0.003 |
| | | **  | | | | |
| うれしい | 2.45±0.7 | 2.38±0.7 | 2.61±0.4 | 2.23±0.7 | 2.72 | 0.047 |
| | | | *  | | | |
| はずかしい | 0.30±0.6 | 0.45±0.9 | 0.21±0.5 | 0.26±0.4 | | |
| すがすがしい | 1.19±0.9 | 1.16±0.9 | 1.11±1.0 | 0.92±0.8 | | |
| くるしい | 0.42±0.8 | 0.16±0.4 | 0.47±0.8 | 0.26±0.6 | | |
| いじらしい | 0.78±0.9 | 0.90±0.9 | 0.87±0.8 | 1.02±0.8 | | |
| やかましい | 0.71±0.6 | 0.85±0.6 | 0.76±0.7 | 0.69±0.6 | | |
| しろい | 1.00±1.0 | 0.85±0.9 | 0.66±0.8 | 1.04±0.8 | 2.92 | 0.037 |
| | | | *  | | | |
| あつかましい | 0.07±0.2 | 0.09±0.2 | 0.11±0.3 | 0.09±0.2 | | |
| ほほえましい | 2.85±0.3 | 2.69±0.4 | 2.76±0.4 | 2.52±0.5 | 4.92 | 0.003 |
| | **  | | | | | |
| むずかしい | 1.40±1.0 | 1.61±1.0 | 1.45±0.9 | 1.14±0.8 | 2.84 | 0.040 |
| | | *  | | | | |
| うまい | 2.02±0.8 | 2.07±0.8 | 2.00±0.8 | 1.52±0.9 | 6.22 | 0.001 |
| | *  | **  | *  | | | |
| てれくさい | 0.85±0.9 | 0.75±0.7 | 0.48±0.7 | 0.46±0.5 | 4.95 | 0.003 |
| | *  | *  | | | | |
| あかるい | 2.21±0.8 | 2.16±0.9 | 2.19±0.7 | 1.95±0.8 | | |
| なれなれしい | 0.30±0.6 | 0.16±0.5 | 0.23±0.5 | 0.16±0.4 | | |
| あまい | 1.26±1.2 | 1.38±1.1 | 1.42±1.1 | 1.23±1.0 | | |
| めんどくさい | 0.45±0.5 | 0.45±0.5 | 0.47±0.5 | 0.57±0.5 | | |
| たのしい | 2.21±0.7 | 2.07±0.9 | 2.16±0.8 | 1.95±0.7 | | |
| こわい | 0.68±0.9 | 0.97±0.8 | 0.75±0.8 | 0.56±0.7 | | |
| みずみずしい | 1.80±0.9 | 1.88±1.0 | 1.69±1.0 | 1.47±1.0 | 2.81 | 0.042 |
| わずらわしい | 0.19±0.3 | 0.26±0.4 | 0.19±0.3 | 0.23±0.4 | | |
| やさしい | 2.04±0.9 | 2.14±0.8 | 1.85±0.9 | 1.42±0.9 | 11.5 | 0.000 |
| | ***  | ***  | *  | | | |
| うっとしい | 0.19±0.3 | 0.19±0.3 | 0.19±0.4 | 0.21±0.4 | | |
| うつくしい | 1.59±1.0 | 1.57±1.0 | 1.69±0.9 | 1.21±0.8 | 4.35 | 0.006 |
| | *  | | **  | | | |
| じれったい | 0.52±0.8 | 0.57±0.8 | 0.35±0.6 | 0.66±0.7 | | |
| すばらしい | 2.54±0.6 | 2.14±0.9 | 2.59±0.5 | 2.09±0.8 | 7.77 | 0.000 |
| | **  | *  | **  | | | |
| うらめしい | 0.28±0.6 | 0.35±0.7 | 0.30±0.7 | 0.28±0.6 | | |

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

Table 4 Comparison of cognition about maternity

| n=42 | | | | | | |
|----------------|----------|----------|----------|----------|------|-------|
| 下位概念 | 講義後 | 演習後 | 実習後 | 4年次 | F値 | 有意確率 |
| 女性特有の性質 | 16.2±2.1 | 16.4±2.6 | 16.3±2.4 | 15.5±1.9 | | |
| 母親の性質 | 15.1±2.5 | 15.5±2.5 | 14.9±2.8 | 14.3±2.2 | | |
| 誰もが持つ心の傾向性 | 16.8±2.0 | 16.7±1.9 | 16.9±2.4 | 15.5±2.2 | 5.55 | 0.001 |
| | * | * | ** | | | |
| 幼いいのちに対する慈しみの心 | 15.9±2.1 | 16.3±2.3 | 16.4±2.0 | 15.4±1.8 | 2.81 | 0.041 |
| | | | ** | | | |

*p<0.05, **p<0.01

Table 5 Item-by-item comparison of cognition about maternity

| n=42 | | | | | | |
|---|----------|----------|----------|----------|------|-------|
| 項目 | 講義後 | 演習後 | 実習後 | 4年次 | F値 | 有意確率 |
| 1 子どもとの関係を築きながら人間として育てていく力 | 4.45±0.5 | 4.23±0.9 | 4.26±0.6 | 4.11±0.5 | | |
| 2 妊娠 出産 授乳に関わる機能 | 4.19±0.7 | 4.14±0.9 | 4.07±0.6 | 3.92±0.7 | | |
| 3 出産し愛情をもって育児に当たる女性特有の天分や役割の総称 | 4.04±0.8 | 4.21±0.9 | 4.09±0.7 | 3.87±0.7 | | |
| 4 自分の保護を求めている幼く小さい子どもを受け入れる優しさ | 4.35±0.6 | 4.31±0.8 | 4.34±0.6 | 4.00±0.6 | 3.06 | 0.031 |
| 5 女性特有の母なる性質 生殖と子育てに関する性質 | 3.88±0.7 | 4.14±0.8 | 4.07±0.8 | 3.88±0.5 | | |
| 6 自分以外の命に対する慈しみの心 弱い存在へのいたわり | 3.90±0.9 | 3.95±0.9 | 4.09±0.8 | 3.97±0.7 | | |
| 7 子どもをもつ女性が子どもとの関係の中で発揮する育児能力 | 4.14±0.6 | 4.07±0.8 | 4.07±0.8 | 3.90±0.7 | | |
| 8 子どもを育てようとする傾向性で誰もがもつ | 4.04±0.9 | 4.04±0.9 | 4.11±1.0 | 3.69±0.9 | | |
| 9 産む性として自然で豊かなもので素晴らしい女性の特権 | 4.14±0.7 | 4.04±0.8 | 4.04±0.8 | 3.87±0.7 | | |
| 10 子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち | 4.50±0.5 | 4.50±0.5 | 4.59±0.5 | 4.16±0.5 | 5.88 | 0.001 |
| | * | * | ** | | | |
| 11 子どもを包み保護する精神機能で誰もがもっている | 4.02±0.8 | 3.94±0.8 | 4.12±0.9 | 3.71±0.9 | | |
| 12 保護 心配 世話 いたわり 接触などの言葉で表現される行動様式 | 3.73±0.6 | 3.80±0.8 | 3.71±0.8 | 3.52±0.7 | | |
| 13 社会的 生理学的 感情的な統一体としての母の子に対する関係を示すもの | 3.73±0.7 | 3.95±0.6 | 3.69±0.8 | 3.42±0.8 | 4.22 | 0.007 |
| | | ** | | | | |
| 14 自分の子どもだけでなく すべての子どもに対する愛情でわが子意識に限らない | 3.85±1.0 | 4.04±0.8 | 3.97±0.7 | 3.71±0.8 | | |
| 15 子どもが可愛いのはあたりまえで 無条件で子どもを愛する母親の性質 | 3.56±1.0 | 3.73±1.0 | 3.58±1.1 | 3.56±0.9 | | |
| 16 子どものために命を惜しまない母親の性質 | 3.65±0.9 | 3.73±1.0 | 3.63±0.9 | 3.43±0.8 | | |

*p<0.05, **p<0.01

母性に関する認知16項目の4時期の平均値はTable 5に示した。最も低い項目をみると、講義後、演習後、実習後は、「子どもが可愛いのはあたりまえで、無条件で子どもを愛する母親の性質」であり、4年次は、「社会学的、生理学的、感情的な統一体としての母子に対する関係」であった。一方、最も高い項目をみると、4時期とも「子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち」であった。16項目の4時期の平均値を比較した結果、3項目に有意差が認められた。「自分の保護を求めている幼く小さい子どもを受け入れる優しさ」[F (3, 120) = 3.06, $p=0.031$], 「子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち」[F (3, 120) = 5.88, $p=0.001$], 「社会学的、生理学的、感情的な統一体としての母と子に対する関係」[F (3, 120) = 4.22, $p=0.007$]であった。多重比較の結果、「子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち」は、4年次より講義後 ($p=0.039$), 演習後 ($p=0.011$), 実習後 ($p=0.002$) が高かった。「社会学的、生理学的、感情的な統一体としての母と子に対する関係」は、4年次より演習後 ($p=0.007$) が高かった。

考 察

母性意識を対児感情および母性に関する認知として、4年制課程の看護学生42名を対象に、3年次の母性看護学の講義後、演習後、実習後および4年次の全ての実習終了後の4時期の縦断調査を行った。以下に、4年制課程の学習進度に伴う母性意識を考察する。

まず、対児感情の結果から、接近感情は回避感情をすべての時期において上回っており、看護学生は、児に対して好意的であることが明らかになった。特に、項目別では「ほほえましい」、「あたたかい」は高い得点を示していた。母性看護学講義後、演習後、実習後の接近感情は、未婚の女子大学生の結果より高く、乳幼児を育てる母親と等しい値⁹⁾であった。これは、看護学生の特徴として示された榮らの結果¹¹⁾と同じである。今回の結果からも乳児との接触経験が約8割を占めており、看護学生の乳児に対する関心の高さが、接近感情の高さにつながったと考える。また、看護短期大学の1年次から3年次の縦断調査⁸⁾や看護大学生の母性看護学講義開始前から母性看護学実習終了後の縦断調査⁹⁾においても、母性看護学の学習進

度が進むにつれて対児感情が高まる結果と一致するものである。母性看護学の講義、演習、実習が連動していくことにより対児感情のなかで特に接近感情を高め、それを維持することにつながった。

講義では、「聞く」、「見る」という手段を用いて、思い描くことで看護を経験し、演習では講義より实际的であるが、擬似的な体験から得られるもので、実習では最も实际的な経験である¹³⁾。このように、講義、演習、実習の過程を経ることで、少しずつ現実的な対象との関わりを経験する。対象に対する想像から具体的に関わる経験によって、対象の理解が深まっていくと考える。母性看護学のなかでも、講義では、新生児の基礎知識を学び、身近な存在ではないが、その対象を想像することができる。演習では、新生児人形を活用して沐浴や抱っこ、オムツ交換などの看護技術を修得し、育児擬似体験人形を活用して育児を擬似体験しながら新生児への学びを深められることが明らかにされている¹⁴⁾。実習では、実際に新生児を抱っこしたり、あやしたり、沐浴をすることで、五感を通して新生児と接することができ、乳児に対する肯定的な感情が高められ、それが維持されやすいのではないかと推察する。また、母性看護学と平行して小児看護学の講義、演習、実習が行われたことにより、小児看護学においても乳児の想像が形成されやすく、実際の乳児に接する経験などが影響したと考える。

次に、母性に関する認知は、母性看護学講義後、演習後、実習後および4年次のすべての時期において高い値であった。これは、松村¹²⁾の男女学生の調査、子育て中の母親父親の調査より高い傾向である。看護学生を対象とした結果では、看護短期大学の1年生より3年生が高く¹⁰⁾、この3年生の値と今回の対象の各時期の値は近似であった。このことから、看護学生は看護の教育課程において、特に、母性看護学の講義を受講することは、母性に関する認知を高め、それは4年次まで維持されることが明らかになった。母性に関する認知のなかで、「子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ちである」は、すべての時期において高い値であり、『母性』は、子どもを通して芽生える感情であると最も認識されていた。しかし、下位概念の【誰もが持つ心の傾向性】および【幼いのちに対する慈しみの心】は、4時期を比較すると4年次には低下する。このことから、母性に関する認知のなかで、母性に関する性質的なもの

は認識を維持されやすいが、感情的なものは認識を維持することが難しいと推察された。

このように、対児感情および母性に関する認知を母親意識として捉えると、看護学生は母性看護学の講義、演習、実習を経験することによって母性意識を高め維持されることが示された。しかし、今回、母性看護学実習の経験から1年後の4年次の調査と比較すると、これまで高め維持されていた母性意識が低下するという推移がみられた。実習経験からの調査のなかで、保育専攻大学生を対象とした実習経験から育児に対する感情の推移を調査した研究¹⁵⁾がある。この育児に対する感情の推移をみると、3年次の保育実習を経験した後は、育児への肯定感情の増大と否定感情の低下が示され、その感情は2ヵ月後もほぼ変わらず維持されていた。また、3年次の保育実習から1年後の4年次の調査では、育児の肯定感情が低減し、否定感情が増大していた。4年次で育児に対する感情が否定的となった具体的な要因は明らかにされていないが、これまでの学生個々の学びを通して、乳幼児や子どもへのかかわり、育児に関わる現実の厳しさを認識したためと考えられていた。今回の調査でも、母性看護学実習の経験から1年後の4年次の調査をした時期は、地域における実習や統合実習を経て、4年間の看護教育の殆どを修め、国家試験の学習や就職活動に専念している時期である。この時期に至るまで、様々な経験が学生個々に積み重ねられ、その経験が一人ひとりの母性意識にも影響を及ぼしたことが、4年次の母性意識の低下として表れたのではないかと推測する。

以上のことから、4年制課程看護学生の学習進度に伴う母性意識を縦断調査した結果、看護学生の特徴として、母性意識である対児感情および母性に関する認知は高いことが明らかとなった。また、看護学生の母性意識は、母性看護学実習の講義、演習、実習を通して高められ維持されることがわかった。母性看護学において妊産褥婦および新生児の基礎的知識を学び、擬似体験を通して、実習では妊産褥婦および新生児と直接ふれあう経験は看護学生における母性意識の維持向上に寄与していることが示唆された。このことから、親準備期にある青年が、母性に関する知識を修得したり、擬似体験したり、対象とふれあう体験は、母性意識を高める方法として有益性があるといえる。

今後、4年次に母性意識が低下する要因を調査

し、4年制課程における母性看護学の教育方法を検討していくことが課題である。

結 論

4年制大学看護学科42名を対象として、3年次母性看護学講義後、演習後、実習後、および4年次の全ての実習終了後の4時期に母性意識として対児感情および母性に関する認知の縦断調査を実施し、学習進度に伴う母性意識を検討した。

その結果、看護学生の対児感情はいずれの時期においても接近感情が高く、児に対して好意的であることが示された。また、『母性』という言葉に対する認識も高いことが明らかとなった。さらに、学習進度に伴う母性意識として、3年次の母性看護学講義後、演習後、実習後の3時期に比べ、母性看護学実習後1年を経過した4年次では、低下する傾向がみられた。このことから、4年制課程の看護学生は、母性看護学の講義、演習、実習が連動するなかで、対象である妊産褥婦および新生児の学習を深め、実際に対象と接し、対象を身近に感じることで、母性意識は高められ、維持されていた。したがって、妊産褥婦および新生児を実像として学び・触れる機会を設けることは、母性意識の維持向上につながることを示唆された。

文 献

- 1) 新村出 (2008) “広辞苑”，第6版，岩波書店，東京，p2589.
- 2) 石井邦子，工藤美子，島袋香子，高橋真理，堤治，森恵美 (2007) “母性看護学概論”第10版，医学書院，東京，p11-12.
- 3) 松本清一 (1992) 母性と父性. 母性衛生 33(1): 5-16.
- 4) 大日向雅美 (2000)，“母性の研究”第6版，川島書店，東京，p107-169.
- 5) 花沢成一 (1992)，“母性心理学”第1版，医学書院，東京，p9-51.
- 6) 野口純子，植村裕子，竹内美由紀，榮玲子，宮本政子，松村恵子 (2002) 母性看護学の学習進度と母性意識に関する研究. 第33回日本看護学会論文集看護教育: 129-130.
- 7) 笹野京子，長谷川ともみ，堀井満恵，塚田トキエ (2001) 母性看護学実習における母性意識の変化. 富山医科薬科大学看護学会誌 4: 41-50.

- 8) 大槻優子, 東亜紀, 野田洋子 (2003) 女子看護学生の母性意識と母性看護学実習との関連. 順天堂医療短期大学紀要 14: 65-74.
- 9) 濱邦子 (2004) 看護学生の対児感情の発達. 母性衛生 45(2): 180-187.
- 10) 岡宏美, 貞岡美伸, 上山和子 (2005) 青年期女子の母性意識調査. 第36回日本看護学会論文集母性看護: 107-109.
- 11) 榮玲子, 野口純子, 宮本政子 (1999) 医療短期大学生における母性意識の特徴. 香川県立医療短期大学紀要 1: 71-77.
- 12) 松村恵子 (2005), “母性意識を考える” 第1版, 文芸社, 東京, p38-59.
- 13) 藤岡完治, 堀喜久子 (2002), “看護教育の方法” 第1版, 医学書院, 東京, p64-68.
- 14) 植村裕子, 榮玲子, 松村恵子 (2008) 母性看護学における育児擬似体験人形を活用した演習効果. 母性衛生 49(1): 107-113.
- 15) 大井裕紀子, 中山哲哉, 栗田喜勝 (2008) 保育専攻大学生における育児生の形成促進. 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要 13: 145-153.

Abstract

A longitudinal survey was conducted among students of the department of nursing of a four-year university to grasp the relation between the learning progress of student nurses and their maternal consciousness. The contents of the survey were (i) basic attributes and (ii) feelings toward children and cognition about maternity as maternal consciousness. The survey was conducted after the lectures on maternity nursing in the third grade, after seminars, after practical training, and in the fourth grade. As a result, it was ascertained as a character of student nurses that their maternal consciousness was high. However, their maternal consciousness in the fourth grade was lower than that after the lectures on maternity nursing in the third grade, after a seminar, and after practical training. Thus, it was suggested that although their maternal consciousness was raised and kept high by learning about women in the gestation and puerperal period and newborn babies through lectures and seminars and having intimate feelings toward them during practical training, their maternal consciousness lowered one year later. Therefore, providing student nurses with an opportunity to learn about and get in contact with women in the gestation and puerperal period and newborn babies will raise and keep high their maternal consciousness.

受付日 2008年10月6日

受理日 2008年12月26日